

## そのがんばりやよさをいつまでも

最近歩いて登校しているK君。彼は今がんばっています。その姿を見ると、私は毎日うれしくなります。「歩いて登校ぐらいで」と思う人もいるかもしれませんが、これまで車で送迎してもらったり、時には休んでしまったりしていた彼です。そんな彼が、この暑さの中、毎日自分の脚で歩いて通うようになりました。

今朝もいつものように彼を待っていました。ほとんどの生徒が私の前を通過して行き、あとはK君だけです。しかし、いつまで待っても彼の姿が見えません。体調が悪くなってどこかで休んでいるのかもしれないと思い、私は彼を途中まで迎えに行ってみることにしました。

遠くに彼の姿が見えました。片手にタオル、片手に水筒を持って大きなからだを持ち上げるように、ゆっくりゆっくり坂を登ってきます。横断歩道の手前にさしかかったとき、彼はぴたりと止まり、汗をぬぐいながら、水筒のお茶を飲み始めました。小休止している彼の前を、数台の車が通りすぎていきました。

飲み終わると、彼はもう一度汗を拭き、横断歩道を渡る態勢に入りました。すると、一台の車が停止線で止まってくれたのです。

彼は、私がこれまでに見たことのない素早い動きで、早足に横断しました、すると、くるっと後を振り向いて、止まってくださったドライバーに向かって、彼は深々とお辞儀をしました。そのお辞儀を見たドライバーは、にこりと笑って彼の前を通り過ぎていきました。

実にさわやかな光景でした。周りの暑さとは違う、ほのぼのとした空気が流れました。歩行者とドライバーの心が通い合った素敵な瞬間に私は立ち合いました。

都会の横断歩道では、こういう光景はまず見られません。歩行者は当然のように、自分のペースで歩きます。運転手に対する感謝の気もちを歩行者が表すことはまずありません。運転手が笑顔で歩行者を見守るといってもないでしょう。権利と義務が交差するだけの都会の横断歩道は、実に味気ないものだと私は常に思います。

暑さと弱い自分に負けず、自分の脚で歩いて登校するようになつたK君のがんばりと、歩行者と運転手がほんの一瞬心を通わせあつたさわやかさで、暑さが気にならなくなりました。K君のように、自分なりのがんばりを積み重ねている生徒、横断した後に礼儀正しくお辞儀する生徒が北中にたくさんいます。そのがんばりやよさはいつまでも持ち続けてほしいと願っています。

(八月二十一日 記)